The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	顎変形を伴う幼児顎関節強直症の1例
Author(s)	磯村, 恵美子; 榎本, 明史; 妹尾, 日登美 他
Citation	日本顎関節学会雑誌. 2012, 24(特別), p. 114-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89883
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

B-2-3-6

顎変形を伴う幼児顎関節強直症の 1 例

Management of mandibular ankylosis associated with mandibular asymmetry in infancy

磯村恵美子[1]，榎本明史[2]，妹尾日登美[3]，古郷幹彦[1]
[1]大阪大学歯学部附属病院口腔外科 1（制御系）
[2]近畿大学医学部附属堺病院歯科口腔外科
[3]行岡病院歯科口腔外科

目的：顎関節強直症については数多くの報告がされているが，幼児の症例報告は少ない．今回，我々は 1 歳児の先天性と思われる顎関節強直症の 1 例を経験したので報告する．
症例：患者は 2001 年 7 月出生，出生時より左頬部に原因不明の骨様隆起を指摘されるも放置していた．2002 年 5 月（生後 9 ヶ月）に某病院口腔外科を紹介され，治療法について説明うけるもセカンドオピニオンを求め，当科紹介となった．2003 年 4 月（1 歳）初診時，顔面の左右非対称，オトガイ部の左方偏位および下顎後退，開口障害を認め，開口量は 1mm であった．2003 年 12 月（2 歳）に左側顎関節形成術を行い，開口量が 15mm まで改善した．その後 FKO 装着にて開口量を保持しながら外来にてフォローしていたが，半年後 FKO の使用をしなくなり，11 ヶ月後には外来通院が中断した．2008 年 3 月通院中であった小児歯科より開口量の減少を指摘され当科に紹介された．再診時，開口量 7.2mm であったため，6 月（6 歳）左側顎関節再形成術を施行した．術後は開口量が 20mm まで改善，術後はバイトブロックを作成し開口訓練を実施，術後 2 カ月で開口量 25㎜ まで改善し，以後通院にて開口量が維持できている．
結果：幼児は治療の協力を求めるのが困難であるが，術後の開口訓練および通院の管理は重要と考えられた．今後，矯正治療を進めながら発育を待ち，仮骨延長などの外科矯正をする予定である．
結論：幼児の顎関節強直症の症例を経験したので報告する．